

## 2022年度Joint Education Programウズベキスタン・スタディツアー報告

木村暁（東京外国語大学大学院総合国際学研究院）

### 1. 実施場所

ウズベキスタン共和国タシュケント市（タシュケント国立東洋学大学ほか）、サマルカンド市（サマルカンド経済サービス大学ほか）、ブハラ市（ブハラ国立建築・芸術保護区博物館管区）

### 2. 実施形態

各大学での学生交流（課題にしたがったグループワークとプレゼンテーションなど）、歴史文化遺産見学、民家での現地文化体験（調理実習など）

### 3. 実施日程

2023年3月13日～2023年3月23日

### 4. 実施内容

本学中央アジア専攻の教員2名（島田志津夫、木村暁）の引率のもと、19名の学生が現地研修と学生交流を目的としてウズベキスタン・スタディツアーを実施した。参加学生の専攻別内訳は中央アジア専攻生13名と他専攻生6名（ロシア専攻2名、モンゴル専攻2名、トルコ専攻1名、イタリア専攻1名）、また、学年別内訳は1年生11名、2年生7名、3年生1名であった。本学での事前学習（2023年2月2日および3月9日に実施）においてウズベキスタンについてのある程度の予備知識を得るとともに、現地において取り組むべき課題をグループ（7つのグループを編成）ごとに設定したうえでスタディツアーに臨んだ。

一行は3月13日晩に首都タシュケントに到着後、14～17日には本学の協定校であるタシュケント国立東洋学大学の日本語講座の学生たちと学生交流をおこなった。14日の学生交流の開始に先立っては、先方グルチェフラ・リフスィエヴァ学長や日本学部長らの立ち合いのもと本学GJOの開所式をおこない、両学間ならびに両国間の学术交流のさらなる発展のため今後も相互に協力を重ねていくことを確認した。

その後開かれた交流会では、東洋学大学の学生たちが自国やその文化について紹介するプレゼンテーションを日本語でおこない、その後、本学側の7グループそれぞれに先方の学生3、4名ずつが加わるかたちで混成グループが結成され、あらかじめ設定されていたテーマ（言語状況、伝統装飾、教育言語、イスラーム建築、ソ連の記憶、服飾、年中行事）にしたがってグループごとに調査の実施計画が相談、決定された。15～16日に各グループの学生はタシュケント市内各所でグループワークを実施し、17日に東洋学大学で開催された報告会では、7つのグループがそれぞれのテーマに関する調査結果を報告するプレゼンテーションをおこない、実地調査によ

って得られた成果の共有がはかられた。

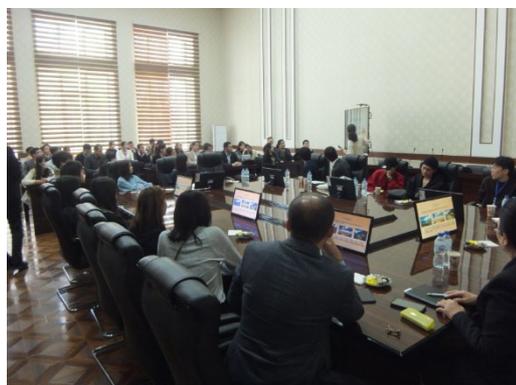


タシュケント国立東洋学大学での学生交流

18日の朝、サマルカンドに鉄道で移動した。サマルカンドに到着後、サマルカンド経済サービス大学において同学およびサマルカンド外国語大学の学生たちと学生交流をおこなった。これに際しては本学の学生2名が本学および日本の文化について紹介する発表を英語でおこない、先方からも学生2名がサマルカンドやウズベキスタンの文化を英語で紹介した。その後、現地の学生の同伴を得て市内の歴史文化遺産（グーリ・アミール廟、レギスタン広場など）を見学して回った。翌19日も、世界的に有名なウルグベク天文台や内外の参詣者、観光客が集うシャーヒ・ズィンダ墓廟群、また、サマルカンド・アフラーシヤーブ都市史博物館とその傍らに広がるアフラーシヤーブの丘などを見学したのち、市内の民家を訪問し、民族料理の調理実習、春分祭（ナウルーズ）にまつわる伝統行事体験、民族衣装装着などの実習の機会をもった。

20日の朝ブハラに鉄道で移動し、ブハラ国立建築・芸術保護区博物館管内の歴史文化遺産の建造物群と博物館を見学し、翌21日は郊外に所在するブハラ・アミール国君主の離宮（博物館を兼ねる）の見学をおこなった。ブハラからは21日晩に鉄道でタシュケントに移動した。

22日には、第二次大戦後に当時ソ連の一構成共和国であったウズベキスタンの地に抑留された旧日本兵の墓地と資料館（タシュケント市内に所在）の見学もおこなった。その後、市内の公園でおこなわれていたナウルーズの催しの見学をもって予定していた全日程を終了し、一行は帰国の途についた。



サマルカンド経済サービス大学での学生交流



サマルカンド市内のビービー・ハヌム・モスク



ブハラ市内のシナゴーク



タシュケント市内の日本人墓地

## 5. 成果

今回のウズベキスタン訪問は、参加学生19名のほとんどにとっては初めての機会であった。タシュケント国立東洋学大学や、サマルカンドの経済サービス大学および外国語大学など現地側協力者のサポートにも支えられながら、各学生は短期間のうちに現地に慣れ、その生活や文化にじかにふれるなかで現地への理解を着実に深めていった。とくに現地学生との交流のなかで、ウズベキスタンの人々の考え方や価値観を感じとり、社会や経済、人間関係がどのように営まれているのかを多少なりとも洞察する視点が得られたといえる。3月17日に開催されたグループワークの報告会でもそうした成果の一端はよくうかがえた。学生どうしはおおむね日本語か英語かを用いて先方学生と会話し、あるいは多くの場合、先方学生の助けや通訳を借りて

現地の人々とコミュニケーションをとっていたが、このスタディツアーの経験は中央アジア専攻生をはじめ本学の参加学生の多くにとって、ロシア語やウズベク語、あるいはそれ以外の外国語や外国文化の学習への意欲向上につながるものと期待できる。現地の言葉で円滑なコミュニケーションを果たすことの難しさを実感できたこともまた、現地こそ得られた成果の一つといえよう。このスタディツアーは間違いなく、参加学生にとって現地経験から自分なりの課題や目標を見出し、研鑽を続けるための足がかりを提供するだろう。

サマルカンドとブハラの世界文化遺産は登録されているが、そうした価値の高い史跡や文化財の数々を現地の協力者やガイドによる詳細な説明を受けながら実地に見学できたこともこのスタディツアーならではの醍醐味であり、参加学生にとって現地の歴史と文化をより深く理解するための何よりの教材となったはずである。

最後に、ウズベキスタン・スタディツアーは、これまでコロナ禍で3度にわたって中止を余儀なくされてきたが、今回じつに4年ぶり（今回は2019年3月に実施）に再開に漕ぎ着けることができた。それにつけても、現地に足を運ぶことの大切さとありがたさを参加者各人が身にしみて理解する機会となった。今後も継続して実施していければ幸いである。